満州移民研究における社会学的方法の可能性

蘭 信三

はじめに

本報告の目的は，私のこれまでの「満州農業移民」研究[1]（以下括弧をとり満州移民と略す）を紹介することによって，満州移民研究における社会学的方法の可能性を総括することにあります[2].

このように報告の目的を大上段に構えましたが，皆さんは戦後世代のかたが多いでしょうから，「満州移民」といっても知らない人が多いと思います．もちろん，言葉としては知ってはいても，深く理解されているかたは少ないでしょう．そこで，まずは，私のこれまでの研究経緯と内容について紹介しまして，いったい満州移民とはどのような人たちで，どういう経緯で満州に移住し，満州でどのような体験を経て，戦後どのような人生を生きたか，すなわち満州移民の「生きられた人生」についての理解を深めていただきたいと思います．そして，それと同時に，私がこれまで行ってきた満州移民への社会学的研究を紹介しますが，それが果たして有効であったのかどうか，さらには，私の研究が社会学的研究においてどの程度の可能性を提示しているのかについてご意見を聞かせていただきたいと思っています．

本報告の鍵概念は，以下の三つのグループから成っています．すなわち，まず第一のそれは，歴史的な事項群で，満州農業移民，「満州国」[3]，植民，中国「残留」[4]者，中国帰国者，そして満州開拓体験です．中国「残留」者とは，敗戦後も日本に引き揚げずに日中の国交が回復するまでの約40年以上にもわたって中国に「残留」した人たちです。そして，その後中国から帰国した人たちを中国帰国者といいます．それに，最後の満州開拓体験は，具体的には，植民地体験，敗戦体験，引き揚げ体験，「残留」体験を含んでいます．第二は，いま流行の国民国家論[5]に含まれる，国家と民族と個人，ナショナリズム，それにポストコロニアリズム研究[6]です．そして，最後は，社会学の方法論としての「生きられた世界」，生活史法あるいはライフヒストリー法，そして恥知らずの折衷主義[7]です．

これらの鍵概念を手がかりとしながら，本報告を以下のように構成しています．まず，最初に，私の満州移民研究の経緯と内容を紹介します．つぎに，満州移民研究の社会学的含意（implication）について考察します．また，私の社会調査の立場を紹介しその可能性について考えていただきます．さいごに，出来ましたら，満州移民体験研究を戦争体験論，あるいは国民国家論の脈絡で考えていきたいと思っています．

なお，ここであらかじめ断っておきますが，最近新聞等で「満州国」研究についての記事がときどき出てきますが，その折りに出てくるのは，「満州国」自体の研究が中心となっています．それに比べて私の場合は，「満州国」が主要な対象ではなく，「満州国」にかかわった人達の生きられた人生が主要な対象になります．その人達の生きられた人生のなかに「満州国」が絡んでくるわけで，その限りで「満

ARARAGI Shinzou 京都大学留学生センター・大学院人間環境学研究科教員；
e-mail: araragi@ryugaku.kyoto-u.ac.jp

州国」と私の研究の接点があります．したがいまして，私の研究は，現在話題になっている「満州国」研究[8]とも違いますし，従来のオーソドックスな社会学の研究からも随分それた，どっちつかずのところに位置づけられた研究と言えるでしょう．

1 満州移民研究の経緯と内容

(1) 農村社会学的アプローチとしての開拓村研究

では，これまでの私の研究について手短かに紹介いたします．まず1984（昭和59）年頃から満州移民研究を始めましたが，その時私は農村社会学を専攻していて，そのなかでも村落共同体論を理論的フレームワークとしていました．共同体論に関心があった私は，幾つかの漁村をまわってそれらを漁村共同体論から見てきました．たとえば，北陸の伝統的定置漁業の漁業システムが，市場経済原理によって大きな変化にさらされながらも依然として村落の共同体性を根底にしていることを見てきました（蘭：1981 a，1981 b，1983）．そして，そんな折りに，私の先生から満州のことを聞かされて，満州移民体験者の菊池悟氏（仮名）との出会いから満州移民研究に足を踏み入れることになりました．したがって，初めは農村社会学のやり方で満州移民の研究をしてみようと思い，満州から引き揚げてきた開拓団が戦後国内開拓地に集団で再入植した村を研究しはじめました．最初は，ひきつづき「共同体」というフレームワークで満州移民研究を始めましたが，これが見事に当てはまるような事例でした．というのは，この事例開拓地区は，満州に開拓団として渡った人たちが戦後引き揚げてきてからも国内開拓地に集団で再入植し，満州体験にもとづく「きずな」によってきわめて強い共同体性を維持していた開拓集団だったからです（蘭：1987 a，1987 b）．このように，満州開拓団が国内に引き揚げた後に，国内開拓地に集団で入植したところが全国各地にあります．ここ札幌あたりならば真駒内の近くにそのような所がありました．ですが注意すべきことですが，そのような開拓地区が必ずしも事例地区のように共同体的というわけではないことです．この事例は，ひとつの典型的事例ですが，それが一般的というわけではないのです．

(2) 海外移民研究としての移民母村研究

まず，その事例開拓地区を研究し，つぎに満州移民を海外移民研究との関連で見ていきました．なぜなら，満州移民というのは1937（昭和12）年以降国策として掲げられた「国策移民」でしたから，海外移民とどのような点が共通しどのような点が相違しているのかという視点で調査したわけです。そうしましたら，予想どおり海外移民と満州移民ではその出身地がまったく違うということがわかりました．言われてみると当たり前のことですが，「海外移民の送出地は西日本」が中心であるのに対し，「満州移民の送出地は東日本」が中心だったのです．それは満州が寒いところなので，東北日本の人たちを中心として当局が送り出していったためで，このようになるのは当たり前なのです．そのように一般的に言われていることを，自分で調べてみたらその通りの結果となりました．そして，つぎに，どういうわけで満州に人々が行ったのかを重回帰分析の方法を用いて検証するために，都道府県を地域単位として各地域の地域特性（自然特性，産業特性，都市特性，家族特性，移民送出特性，政策特性など）を独立変数にして満州移民送出率を従属変数とする重回帰分析を行ったわけです．一般に，移民は貧困が要因と言われるのですが（移民貧困説），満州移民の場合も，昭和恐慌やそれにうち続く東北地方の凶作によって，「内地で食えない貧農の二，三男」たちが満州に渡ったと説明されてきましたが，それを重回帰分析によって検討したのです．結果は，経済的な状況よりも，政策的な要因によって満州移民は

送出されていったことが明らかになりました（蘭：1990）．これらは海外移民の研究でいうところの移民母村研究に当たります．

(3) 満州体験者（集団引き揚げ者）の生活研究

はじめは，このように共同体論や移民母村論などをフレームワークとして研究していましたが，満州移民の人たちと話をしていくうちに次第に彼らの生きられた全生涯に関心が移りライフヒストリー法が私の満州移民研究の中心的方法となってきました．というのも，従来の社会学的手法にしたがって集めてきたデータを従来の概念で「切って」いくには，体験者によって語られるライフヒストリーが私にとってあまりにも重たく，かつ興味深いものであり，それを従来の社会学的概念によって「切って」いくことが次第に出来なくなってきたからです．満州移民体験者によって語られるストーリーそれ自体が非常におもしろかったからですし，そしてもうひとつは，私自身がライフヒストリーのストーリーを概念で切ることに対する「こだわり」があったためです．つまり，「定義してから見る」のではなく「見てから定義」しようと思うようになったからです[9]．

(4) 植民地研究としての満州体験研究

さて，私がこの研究を始めた1980年代はじめは，朝鮮や台湾や満州といったいわば日本の植民地に関する研究はまだタブー視されていまして，そのことを正面からとりあげて議論することは少なかったですね．90年代になって満州や朝鮮，植民地主義のことが社会科学の中では中心的なテーマのひとつとして語られるようになりましたが，当時はほとんど議論されることがなく，私はかなり早い段階でこのテーマに首を突っ込んでしまっていました．そのために，満州移民のことをどのような脈略で考えればいいのか自分自身よく分からない状況でした．このことも，満州移民を概念で切っていくことが出来なかったもうひとつの理由ですが．ただ，満州移民とは「日本帝国主義の尖兵」という従来の切り口では，結論が先にあってそれ以上のものは見ることが出来ないのではないかと考え，無理な話ではありますが，出来るだけ先入観を排して，満州移民体験者によって語られる物語を追体験し，そこから彼らの人生を再構築していこうと考えたのです．植民地研究のことをにらみながら，それとの関連で「満州国」やその「民族協和」[10]の理念と現実を考えながら，そのなかを生き抜いた満州移民体験者ひとりひとりの「生きられた人生」をインタビューをしながら，考えていきました．ここまでが，集団引き揚げ者を中心とする満州移民研究の大まかな経緯です．

(5) 中国「残留」者の「残留」体験と「本国帰国」後の生活と心情

他方，この研究の過程で，私は必然的に中国「残留」者たちと出会いました．彼らは，大半が満州移民体験者であり，敗戦後の生活苦から中国人家庭にはいっていった人たちなのです．みなさんご存じのいわゆる「中国残留日本人孤児」であり「中国残留日本婦人」という人たちのことです．このもうひとつの出会いによって，私の関心は，次第に，戦後すぐに集団引き揚げで帰国してきた満州移民体験者からこのいわゆる中国「残留」者へと移っていき，そのライフヒストリーから，彼らの中国での「残留」体験が「敗戦国民」や「侵略者」というスティグマを背負った人生であり，とりわけ彼らのアイデンティティの在り様が中国「残留」の過程で次第に中国人へと近づいていくのではなく，外見上は限りなく中国的な生活様式に染まりながらも内面においてはますます強く「日本人としての人生」を生きていったのかを見ました（蘭：1992）．そして，その人たちが日本と中国の国交が回復した1972（昭和47）年以降日本へ帰国してくるのですが，彼らの帰国した後の生活実態と，彼らをめぐる日本社会の対応に見られる論理と，彼らが日本社会で生きるうえでのア

イデンティティや心情などを研究してきました（蘭編：1998）.

(6) 満州移民研究および中国帰国者研究の意味するもの

このように，1930年代から現在までを射程に入れて，満州移民体験者のいわば丸ごとの人生を対象として，考えられうる様々な視点から彼らの「生きられた人生」にと迫っていきましたが，最終的には，これら私の一連の研究は，近年のポストコロニアリズム的研究や，新移民を対象とするエスニック・スタディーズ，そして国民国家論やナショナリズム論のなかに位置づけられるべきであろうと考えています．現在，これらをまとめているところです．

2 満州移民の人生経路

(1) 満州農業移民事業の展開

まず，本章で満州移民の人生経路を見ていきたいと思います．

満州移民というのは，1932（昭和7）年から始まった国策事業ですが，表2－1に見るように，移民数は最初年度でわずか1,557人にすぎません．この1932(昭和7)年は，五・一五事件があった年であり，前年の1931（昭和6）年には満州事変が起き，1932（昭和7）年には「満州国」が出来上がり，その直後にこの満州移民事業が走りだしたのです．この1,557人という人数は，翌年のブラジルへ移民した23,299人と比べると1割にも満たないかなり小規模なものであったことがわかります．最初の5年間（1932－36年）は試験移民期といい，移民が試験的に行なわれていきますが，これが1936（昭和11）年の二・二六事件以降，日本の国家体制が総力戦体制へと突入していき，この直後から本格移民期（1937－41年）として満州移民が一つの国策として大量に送り出されていきます．1938(昭和13)年からは，3万人，4万人，5万人，3万5千人と大量に送り出されていきます．この時期になると，当時のブラジルへの移民数の2万余を大きくしのぎ，ピークのときにはその倍くらいになっていきました．それが1941年(昭和17年)以降急速にしぼんでいきます．数字的に見れば，1942（昭和17）年には2万7千，1943（昭和18）年は2万5千，1944(昭和19)年は2万3千，1945(昭和20)年1万3千と激減し，しかもこの時期の人数の大半は満蒙開拓青少年義勇軍（隊）[11]と呼ばれている人たちであります．大人の開拓団員はこれの半分以下で，移民事業は崩壊期になっていきます．これは日本の総力戦のなかで，20歳以上の人たちはどんどん戦闘要員あるいは準戦闘要員として動員されてしまい人手不足となり，その挙げ句に14歳から18歳までの青少年までもが少年飛行兵などの戦闘要員として動員されましたが，それと同じようなシステムで青少年義勇隊員と言われる人たちが大人の満州移民の激減を補充するべく送出されていったのです．

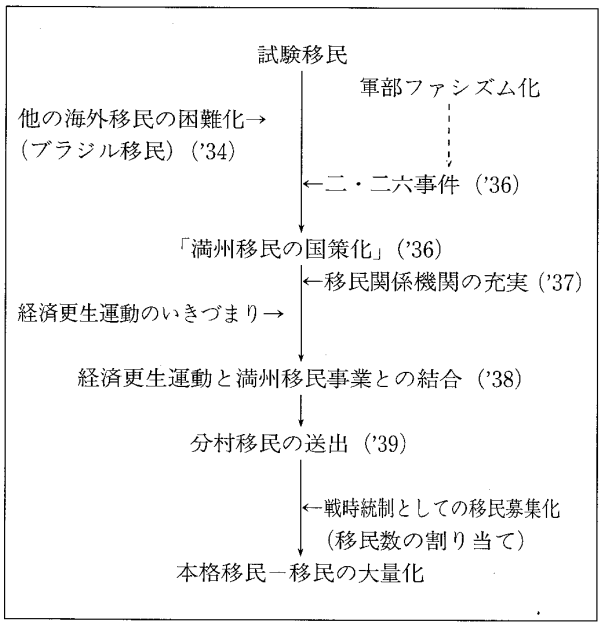
このような満州移民の大量送出への要因連関を，図2－1を見ながら簡単に考えてみれば，総力戦に突入する際の戦時動員の一環として満州移民事業が位置づけれれていることがおわかりになるでしょう．ですが，満州移

表2－1 満州移民の入植状況

年 度	移民数	各期の合計
昭和7年	1,557	
8年	1,715	
9年	946	
10年	3,539	
11年	7,707	小計 15,464
12年	7,788	
13年	30,196	
14年	40,423	
15年	50,889	
16年	35,774	小計 165,070
17年	27,149	
18年	25,129	
19年	23,650	
20年	13,545	小計 89,473
		総計 270,007

（外務省移民局（1964）『海外移住統計』47頁）

図2－1 大量送出の要因連関図



（蘭（1994），58頁，図2－2より）

民体験者一人ひとりに聞けば，移住のもともとの背景としては「貧しかったから満州に行った」と，ほとんどの体験者がそう語るでしょう．では，その「貧しさ」は，どこからきたのでしょうか．移民研究を専攻している大方のひとが指摘してますように，貧困が移民の引き金になったというこの視点は間違いで，ずっと貧しかったら移民は生じません．では，なぜ移民が生じるかと言えば，社会変動があるために移民がでてくるのです．例えば，中くらいの生活を営んでいて，それが下に落ちたときに初めてなんとかしようと思うわけで，その時のひとつの手段として海外移民という選択肢が選ばれていくわけです．実際に満州移民に行った人々も，単純に自分たちが貧しかったからと主観的に思っているだけです．むろん，主観的動機が，行動を決定するのですからそのように思うのも無理はありませんが，じつは本人には見えていない様々な要因がその決定に絡んでいるわけです．社会的背景から見ても，基本的に1930年代に入ってから，1929（昭和4）年の世界恐慌の影響を受けた日本の経済恐慌，農村恐慌，1931（昭和6）年の大不況，不作等というものがからんできます．

ですが，最初から，農村の不況が満州への移民へと直接結びついていったわけではないことに注意して欲しいですね．農村恐慌は，まず，オーソドックスに経済更生運動[12]というかたちで合理的（あるいは超合理的）な農業経済政策によって乗り切ろうとされましたが，農林省による経済更生運動でこの危機を乗り切ることが出来なかったため，農村不況がずるずると続いてしまいます．そして，これが1936（昭和11）年の二・二六事件によって満州移民が国策化されるにいたってはじめて経済更正運動と結びつけられ，国策化として大々的な動員体制が組織化されていきます．したがいまして，「農村の貧しさ」が満州移民に結びついたという単純な話では決してなかったのです．

満州移民を促進する人たちは，そもそも，農村不況の根源には過剰人口と土地不足があり，これを解決しない表面的な経済対策では農村経済が根本から解決されることはない．したがって，これを解決してこそ初めて農村は豊かになれるし，その唯一の方法こそが満州への集団移民であると．しかし，皮肉なことに，移民が本格化する1938（昭和13）年の一年前の日華事変，さらには1941（昭和11）年の真珠湾攻撃による戦線の拡大に伴って，農村は戦争景気によって，「農村不況の根源である過剰人口」が解消されたばかりではなく，人手不足へと陥り，満蒙開拓青少年義勇軍（隊）の設立へと至ったのです．

(2) 満州移民の個人的特性

ここで，渡満の動機や出身階層から満州移民の個人的特性を考えてみましょう．まず，表2－2にしたがって，渡満の動機分析から満州移民のタイプをみますと，(a)喰いっぱぐれタイプ；生活苦から逃れるために渡満したひと，(b)社会的不適応タイプ；内地の慣行や人間関係に適応できないひと，(c)満州憧憬タイプ；満州（海外）への憧れから渡満したひ

表2−2 渡満の動機から見た満州移民の諸タイプ

タイプの類型	各タイプの具体的説明
(a) 喰いっぱぐれタイプ	経済的生活苦を逃れるために渡満した人
(b) 社会的不適応タイプ	内地の慣行・人間関係等に適応しなかった人
(c) 満州憧憬（海外志向）タイプ	満州（海外）への憧れや事業欲によって渡満した人
(d) 国策共鳴タイプ	五族協和など国家のスローガンに共鳴した人
(e) 勧誘タイプ	町村、部落、知人などの勧誘で渡満した人
(f) 開拓花嫁タイプ	開拓団員との結婚で渡満する女性
(g) 家族随伴タイプ	世帯主について行った妻・子供・両親等

（蘭，1994，137頁，表4−2より）

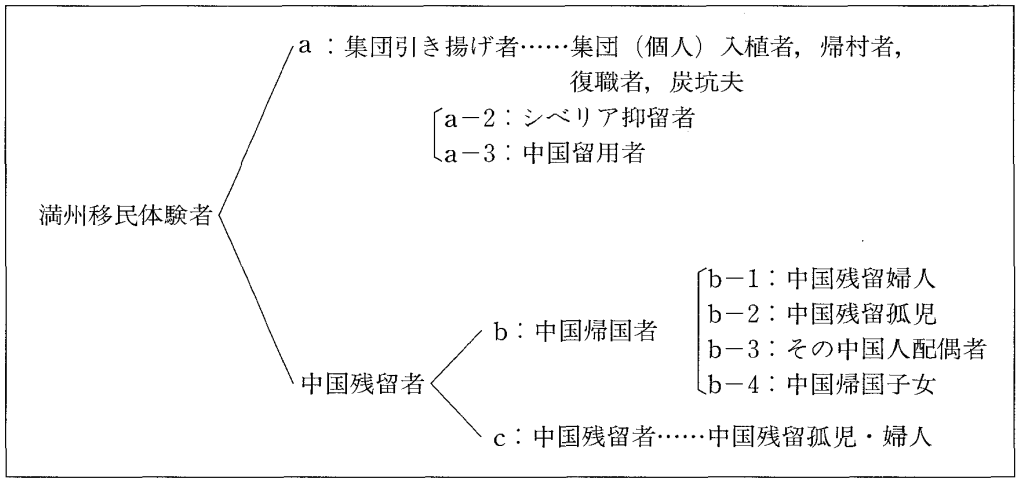
と，(d)国策共鳴タイプ；五族協和などのイデオロギーに共鳴したひと，(e)勧誘タイプ；町村や地区の有力者などの勧めで渡満したひと，(f)開拓花嫁タイプ；開拓団員との結婚で渡満した女性，そして(g)家族随伴タイプ；世帯主について行った妻・子ども・老親など，があげることができましょう．

つぎに，出身階層から満州移民をみましょう．一般に，満州移民は「貧農の二，三男」であったと言われますが，それは大方当たっていますが，完全に正しいわけではありません．私たちの調査資料によりますと，貧農は5割程度で，あとは中農と中上層から成っていました．たとえば，開拓団には団幹部と言われる5名程の有給の人たちがいますが，彼らは地方の篤農家であったり農業専門家である場合が多く，階層的には中上層の人たちと言えます．また，家族類型からみますと，開拓団員とその妻から成る夫婦家族と，家父長と成人した子たちから成る拡大家族というふたつのタイプが見られます．

それに，満州へ移民した人たちの話は共通性とともに，地域によって随分語られる内容に違いがあることがわかりました．ひとつは，「貧しかったから満州へ行った」という一般的に強調されたイメージがありますが，当時私が熊本大学に勤めていた時に熊本の体験者に聞いたのでは，「憧れて満州に行った」という人たちがかなりいました．どうしてかというと，インタビューを1985年から90年の間に行われていたために，私のインタビューに応じてくれた人たちは渡満時期に大人だった人は少なく，当時青年であったひとが大半でした．そのために，新しい国家「満州国」の清新なイメージに惹かれたり「日満一体」という当時のプロパガンダに同調し，さらには「お国のために」行っていた場合が多かったのです．また，九州は大陸に近いので，朝鮮や台湾に行っている人が身近に沢山いて，その身近な人たちの影響で大陸に渡るという指向性が強かったのです．特に熊本は，北米や南米への海外移民も多い「移民県」で，海外に対する指向性が強かったことから，1932（昭和7）年以降の「満州ブーム」[13]に容易に乗りやすい下地があったというのが，私の調査資料から出てきました．

一方，長野県の場合はまた別の特質を浮かび上がらせます．長野県は，3万7千人もの人たちが満州に送出されたのですが，この規模になりますと「自発的」な希望者を待っていてはとうてい不可能です．満州移民というのは，国策といえども兵隊とは違うために法的な裏付けがありません．そのための工夫として，開拓団を郡や町村単位で構成する「分村移民」方式を編み出しました．まず，開拓団の「中心人物」が必要とされ，この中心人物を上手に選び出して開拓団の中核を作りだします．そして，それに参加する一定数の満州移民を選び出すわけですが，開拓団をいったん編成すればあとは強制的に送り出すしかなく，貧しいからとか国に共鳴するからとかいう理由の他に，一定数の割り当てにした

図2－2　戦後体験による満州移民の諸タイプ



（蘭，1994，22頁，図1－1より）

がって「無理矢理行かされた」という人も沢山いたことがわかりました．

私はこのふたつの研究から，「貧しいから満州へ行った」という単純なものではないことがわかり，この研究に一層興味を抱くようになりました．

(3)　満州移民体験者の人生経路とその多様性

さて，満州移民体験者は，私の考えでは，今まで説明したように動機によって分類することもできますが，もうひとつの方法として，図2－2にみるように，戦後どのような人生経路を歩んだかでその分類ができると思いました．まず，満州へ行き敗戦後数年のうちに集団で引き揚げてきた人たちを「集団引き揚げ者」と名づけます．もうひとつのタイプとして，中国に残った人たちを「中国「残留」者」と，そしてそのなかでも1972年以降に日本に帰ってきた人たちを「中国帰国者」と名づけます．すなわち，満州移民体験者は，以上の三つのタイプに分けることが出来ると考えました．私は，この三つのタイプのなかでは，はじめに集団引き揚げ者を中心に研究してきましたが，90年代に入ってから中国帰国者も対象とするようになりました．この2つのタイプ，集団引き揚げ者と中国帰国者たちの話を聞き，比較しながら研究をすれば大変おもしろいものになると思ったからです．ただ，私が書いた本（『「満州移民」の歴史社会学』(1994)）は，ひとつの章では中国「残留」者のアイデンティティについて触れていますが，終戦直後の集団引き揚げ者を中心として書いたものです．

この研究の過程で，満州体験者は多様な側面を持っているのに気づきました．表2－3に示してますように，客観的な側面としては，満州移民は基本的に植民者であり，総力戦の中での国策移民でした．主観的側面としては，敗戦の中で極端な難民体験に遭遇するわけです．この主観的側面が，彼らの体験では中心的なものになります．この後に引き揚げてきたという形になります．集団引き揚げ者は植民の側面ですが，中国帰国者は移民の側面です．これは微妙なのですが，満州移民とはいっても基本的には植民であり，「移民」という言葉を付けるのはナンセンスだと批判されたこともありました．しかし，彼らが満州で体験したことは，そんな単純な植民としてだけではありませんでした．移民の側面というのも当然のことながらあったのです．さらに特徴的な点として，自発的に満州に残った人はほとんどいなかったということです．基本的には帰還してきますが，日本の中でも行き先がなく，国内の入植地へ再入植していく場合が多いのです．通常移民研究をする場合，移民

表2－3 満州移民体験者の多様な側面

〈(a) 「満州」植民の側面〉
・植民＝文化変容を受けない支配者，侵略者，マジョリティ
・国策移民＝国家の重大国策の一環として強行に遂行された
・「難民」体験＝敗戦・引き揚げに伴う体験―彼らの中心体験―
・植民地からの引き揚げ者＝引き揚げ後の内地での生活体験
〈(b) 満州「移民」の側面〉
・移民＝圧倒的人口を占める中国人社会の小数者・マイノリティ
・帰還移民＝中国に定着せずにほぼ全員が帰還した
・戦後国内入植者＝緊急開拓事業によって国内開拓地に入植
〈(c) 中国残留の側面〉
・中国残留体験（残留婦人）＝中国人としての生活体験（適応）
〈(d) 日本帰国の側面〉
・残留婦人の帰国体験＝日本文化との違和感：再適応
・「中国残留体験（残留孤児）」＝血統は日本だが，中国人として育つ
・残留孤児の帰国体験＝中国と日本の間でカルチャー・ショック，異文化適応
・中国帰国子女の来日体験＝同上，及び帰国した両親との葛藤，速い適応

（蘭，1994，24頁，表1－1より）

というのはほとんど「出稼ぎ」でありその結果として定着します．従って，普通どのタイプの移民でも男性が先に行って拠点を作って移民先で結婚するか，家族を呼び寄せて生活をするというパターンであり，その結果，子供が生まれ育っていく中で定着していきます．満州の場合は9割以上の人たちは，資産は全部処分して満州にいきます．従って，日本に帰ってきても戻る先がなく，ほとんどの人たちが戦後の緊急開拓事業(14)にもとづく国内の入植地へと再入植したのです．このように満州移民体験は多様であり，人生経路もまたそうなのです．

(4) 在満日本人の「満州体験」

満州へ行った人たちの満州体験は非常に興味深く，ここでは少しつっこんだ説明をしたいと思います．満州体験は，都市か農村か，北東満州か南満州かという居住地，開拓民か都市のホワイトカラー層かという職業階層，居住期間，年齢，性別，そして集団の統率等々の変数にくわえて，事件との偶然的な遭遇等によってじつに多様です．

ですが，多様な満州体験のなかにも，都市に住んだホワイトカラー層と開拓地に住んだ開拓農民とでは大きく異なる状況にあったことをはっきり認識すべきでしょう．最近の満州研究でも明らかなように，満州の都市部に住んでいた日本人は，当時の日本の都市中流階級の人たちよりもはるかに高い生活水準を享受していました．それに比べると，私の研究対象である開拓団の農民たち（つまり満州移民）は非常に貧しい農村に入植しています．満州の農村に行った人たちの大半は，日本で小作農，小自作農をしていました．彼らは，満州で平均10町歩の農地を所有出来たといいます．満州へ移民した8割の人は夫婦を核とする3人から4人程度の比較的規模の小さな家族で，その10町歩の農地を耕作するのも精一杯でした．残り2割の世帯主と大きな子どもたちから成る10名前後の比較的規模の大きな家族（中規模家族はほとんどいない）は，労働力が多いので10町歩といわず，30町歩，40町歩の農地を農業経営することが出来ました．1930年代の日本での平均耕作地は，一農家あたり1町歩にも満たない状況でしたから，耕地面積の魅力はこの上ないもののようでした．

満州移民事業計画は，当初の理念としては「自作農主義」(15)でしたが，小家族がほとんどの日本人移民たちは自分たちだけで農業を

やっていくことが出来ず，農地の半分ぐらいは現地の中国人農民に小作として出すパターンが増えていきます．自作地も，家族労働力だけで耕作していたわけではなく，世帯主と若干の年雇いの中国人農民を中心に，農繁期には臨時の農業労働者（苦力（くーりー））を雇うという形態で，中国人の労働力に大きく依存しており，当初の理念である自作農主義と大きくかけ離れていました．一方，移民農家の奥さんは，農作業はせずに家事や育児という家内の仕事に専念し，「奥さん」[16]という専業主婦に収まっていました．日本人移民農家は自作地主農家へと社会的に大きく上昇しましたが，しかし内地の農村と満州の農村とでは社会資本の格差のために生活水準に大きな差がありました．内地の農民は経済的に苦しくても一定の生活水準を保っているのに対し，満州の場合は社会資本が乏しかったため全体的に低い生活水準の生活を強いられていたからです．

また，開拓地といってもそれぞれの開拓団には格差があり，非常に「成功」した開拓団と失敗した開拓団があります．都市近郊に計画的に入植し「成功」した開拓団と，行き当たりばったりで失敗する開拓団に別れています．

このように，満州で暮らす日本人は，植民者としてそれなりに恵まれた状況におかれますが，社会資本が都市と農村で極端な格差があったために，都市居住者と農村居住者の生活状況には大きな違いがあったことを確認しておきます．

(5) 満州体験の中核としての敗戦体験

終戦期に満州に居合わせた日本人にとっての原体験は，敗戦前後の満州での「無政府状態下」で繰り広げられた「死と隣り合わせた生の体験」にあったと言えるでしょう．それは，都市においても農村においても基本的には同じでした．しかし，とりわけ，開拓地と称して土地を奪い入植していた開拓団の人々の場合は，その体験がより濃縮されたものでした．

満州移民たちは1945（昭和20）年8月8日を境に，突然奈落の底へと落ち込んでいくことになります．それは，ソ連軍の満州侵攻により難民生活へとたたき落とされていくからです．満州体験の話を聞くと，ほとんどすべての語りが基本的に8月8日から始まります．満州移民にとって，敗戦前後の満州で，無政府状況下で繰り広げられた「死と隣り合わせの生の体験」が彼らの体験の根底にあるからです．それまでの「秩序」が音をたてて崩れたという体験です．特に女性の場合には，敗戦体験の記憶がきわめて鮮明です．生々しいということは，いかにその体験が女性に厳しいものであったのかを物語っているでしょう．

(6) 敗戦時の日本人の状況

ここで，敗戦時の満州移民たちのおかれた状況をもう一度確認しましょう．

満州移民は，日本から27万人のひとたちが渡ったと言われていて，そのうち敗戦時には約5万人の人が兵隊に取られて，残りは22万人，そのうち死んだ人が8万人いました．開拓団27万人の約3割，兵隊に取られた5万人を引いて22万人とすれば，開拓地にいた4割もの人たちが死んでいることになります．当時満州にいた日本人は150万人で，満州全体での死亡者は17万人ですので，8万人は満州全体で死んだ人の45%に当たります．開拓地で物資は略奪され生命の危険にさらされ，開拓団の人達の6割が近くの都市へと逃避行をします．これにより都市は難民であふれ，物価が高騰し，都市住民も半分難民状態へとなっていきました．この時も，さきほどいったように，都市の日本人と開拓団の農民とでは，無政府状態は一緒でも状況は全く違い，都市の人は一定の生活水準を保っていたのに対し，農民たちは何もないのでした．ここで『満蒙終戦史』から北部満州にあった方正収容

所の状況を見てみましょう．ここには8,640人が収容されましたが，そのうち自殺・病死したひと2,360人，現地の妻になったひと2,300人，脱走したひと1,200人，ハルピンへ移動したひと1,200人，ソ連軍に拉致されたひと460人，不明者が1,120人となっています(満蒙同胞援護会編：1962)．これは，驚くべき数字ですが，これは開拓団の死亡率が3割という数字から見れば，例外的なケースではなかったことがおわかりになるでしょう．

3 満州移民の敗戦体験

(1) 敗戦体験

では，ここでR・リフトン（1967＝1971）の『死のなかの生命』にならって，彼ら満州移民たちの敗戦体験を再構成していきたいと思います．

①予感 この敗戦体験がどのようなものであったかというと，1944（昭和19）年あたりから兵隊の召集が始まり，1945（昭和20）年になり，18歳から45歳までの男性を対象とするいわゆる「根こそぎ動員」が行われます．残されたものたちは，1944（昭和19）年あたりから何とはなしに雰囲気が変わり始めたのを感じます．1945(昭和20)年になると，「日本は絶対に負けない」と思いつつも，不吉な予感，敗戦の予感がしてきます．それはなぜかと言えば，周囲の中国人の日本人への眼差し，態度が変わってきたからです．満州の奥地は空襲もなく，物資も不足せず，ある種の胸騒ぎがしても戦乱の予感はありません．中国人の眼差しや態度の変化は，8月になるとはっきりと変わってきた，といいます．ただ，基本的には満州移民たちの住む開拓団というのは，一種のコロニー（日本人の小宇宙）ですから，中国の人たちと接触をするのは普通の人たちにとっては非常に限られており，満州にいるといっても「日本人の開拓地」のなかで暮らしています．したがって，開拓地のなかではすべてのことが日本式で，雇っている中国人も日本語を使うため，まるで中国社会にありながら「日本という小宇宙」のカプセルのなかに生きていたために，彼らが文化変容にさらされることはほとんどありませんでした．

ところが，1945（昭和20）年の8月8日からはじまるプロセスのなかで，彼らはこの「小日本というカプセル」から突然放り出されていくわけです．満州の開拓地というカプセルのなかで暮らしていたわけですが，そのカプセルが壊れ，カプセルだけでなく国家も壊れ，無秩序のなかで「むき出しの個人」として生きざるをえない状況に放り出されたのです．

②敗戦とカオス体験 8月8日にソ連軍が満州に侵攻してきて開拓地の人たちは，逃避行を始めます．日本の軍隊は，2週間程度しか抵抗できずにあっという間に負けてしまいます．しかも周辺の中国人農民たちに「襲撃」[17]を受け，捕らえられたりします．殺されることはほとんどなかったのですが，ほとんどまる裸になるくらいに物は取られてしまいました．このなかで，彼らの生と死が交錯します．彼らは，逃げるときは誰も一言も喋らず，恐ろしいほど静かに静かに逃げていきます．無我夢中で記憶の全体性が喪失され，一方で鮮明な部分的な記憶というコントラストのなかで，非日常的な逃避行を行います．

逃避行，敗戦，秩序の破壊，混沌の中に突き落とされ，日常的感覚＝現実からの離脱感のなかで，通常の秩序感覚意識がなくなっていきます．つまり，植民地の秩序が壊れ，混沌の中に突き落とされ，通常の秩序意識がなくなるのです．しかも，死が日常化するなかで，生と死に関する通常の感覚が失われ，忘れることの出来ない死とその恐怖と遭遇し，「死が生を支配」するという感覚に陥るのです．自己と自己の存在の消滅に対する恐怖，実際にこのような破壊を経験したという気持とも言えるものでしょうか．

③閉ざされた心 混沌のなかで開拓団員の

3割の人たちが亡くなっていきます．生と死の通常の感覚が失われて，「死が生を支配する」という感覚の中で，彼らは生きています．自己と自己の存在が消滅することに対する恐怖，死が日常化した中で肉親が死んでもショックを受けず，日常的なこととして受け入れます．その一方で，ショックを受けない自分にショックを受け，周囲の人と自分の感情に心を閉ざします．いわゆる「心理的締め出し」です．人間の心というのは，恐怖に長時間さらされると，たえることが出来なくなり，自分を守るために感情を向けれなくなっていきます．これは一人の人間の心の中で起こることです．

④分裂と共同と また，開拓団という集団がこの状況の下で，分裂する場合と，共同する場合がでてきます．この絶体絶命の状況下で，彼らは日常の秩序が崩れ，常に生命の危険にさらされながら生きていきます．その中で，皆人間は個人に戻っていくのです．そのそれまでの個人は，開拓団があり，集落があり，家族があり，それから個人があるわけでしたが，その同心円がいっぺんに壊れ，そこからむき出しの個人が放り出されるわけです．絶体絶命の状況で，集団はひとりひとりの利害によって分裂し，複層的な加害被害関係が生まれるのです．たとえば開拓団の権力者が自分たちを護るために若い女性に中国人の有力者と結婚することやソ連軍の将校のところに行くことを強制する，親子の間でも親が子を殺す，親が子を売る等というものです．

しかし，この場合でも同心円が壊れるだけでなく，むしろ同心円が強まる場合もあるのです．絶体絶命の状況でも，優れたリーダーがいて幸運にも共同で凌げた場合，「運命の共同＝共生共死」というきわめて強固な信頼関係による連帯が生じ，普段の開拓団の頃よりも数段すぐれた運命共同体ができることもあったのです．

⑤生存者意識 戦友会の人たちもそうですし，広島，長崎の研究でもそうですが，満州で生き残った人たちにも生存者意識があります．いわゆる特攻世代の人達は，現在のなかで生きていますが，戦友を死なせたり，敗戦が遅れていたら自分が死ぬ番だったのが，敗戦により自分が生き残ると，自分が生きていること，生き残っていることに対し罪悪感を感じているといいます．満州移民の場合も，生き残った人たちは，この生存者意識で苦しみました．

このことは，1945（昭和20）年8月8日以降の約3ヵ月間に集中して起こりました．生き残った人は被害者であると同時に，加害者でもあったのです．そして，当初は感じなかったものの，ある程度落ち着いてくるにつれて次第に生存者意識が芽生えてきます．彼らは単に自分の命を守るだけでなく，心も守らなければいけませんでした．肉親を死なせたり，中国に残してきたり，中国人に売ったり，あるいは自らの手で殺したりしてしまった自分．あるいは，他人を裏切ったり，売ったりして帰国したことへの罪悪感．単に，生き残ってしまっただけでなく，少なからず死んでいった人たちを犠牲にして成り立っている自分の生きる人生を思うときに，彼らはたまらない罪悪感に苛まされるのです．

⑥それでも生きる 8月～10月は逃げまどう人々が沢山いましたが，11月頃には落ち着き，大方の避難民が難民収容所に収容されます．難民収容所に入った人たちは，配給だけでは生きていくことが出来ないので，日稼ぎや家事の手伝いをしたり，あるいは屋台や闇市で物を売ったりと，様々なことをしてお金を得てその日の暮らしを立てていたのです．そこで彼らは収容所でいろいろな人と出会い，いろいろな話を語り合いました．そうすることで心理的な苦しみから解放されることもありました．

⑦極限を生きることとモラル 言ってみれば，彼らは8月8日以降の3ヵ月間，極限の

中を生き抜いてきました．その極限の中をどう生きるか，極限の中のモラルとは何なのかについて考えてみましょう．たとえば，この極限の状況で，女性は資源でした．生きるためには，現地の中国人の妻になるしかない場合もあったのです．そういう形で自分で判断したひとと，開拓団の幹部の人たちの判断で，有力者（中国，ソ連の軍人）の妾になることを強要されたり，さらには，兵隊の相手をすることを強要されることもありました．この時の心理は非常に複雑で，開拓団が生き延びるためには，周りの人たち，中国やソ連の軍人や現地の中国人とうまくやっていくために，ある種の取り引きをしなければいけませんでした．取り引きをする際開拓団の人たちは，8月8日以降お金も無く，土地ももう当然無く団内の若い女性を取引の資源として使っていったのです．にもかかわらず，自ら中国人の妻になった人には，「満妻」[18]（満人[19]の妻という意味）といって，彼らは蔑みました．男たちは自分たちが生き残る資源として，中国人やソ連兵に女を与えておきながら，自らの「意志」で中国人の妻になった人を罵っていたのです．「満妻」と罵る家父長的な男たちの心理には，裏切った自国の女への単純な恨みだけでなく，敗戦によって敵に自国の女を寝取られたという屈辱感とが錯綜したものでしょうが．

⑧極限をしなやかに生きる子どもたち　他人を裏切ったり売ったことへの自責の念に苦しむ大人たちの一方で，子どもたちは極限をしなやかに生き抜いていきました．もちろん，5歳以下の子どもたちの生存率というのは非常に低く，全体で計算してはいませんが，ある開拓団では5歳以下の子供は8割が死んでいます．

ところが，10歳を超えた位の子どもたちは非常にたくましく生きています．最近，赤塚不二夫たちが書いた本のなかで，彼は，「日本が負けたときも，子どもはなんともなかった」（赤塚不二夫：1998），と子どもにとって敗戦は無関係であり，ロシア語を覚えてソ連兵と仲良くなったり，中国人の子どもと普通に遊んでいたことを著しています．ただ，赤塚不二夫さん自身も敗戦によって社会の根底は無秩序であるということを体験したと同時に，社会が無くなっても生きることが出来ることも体験した，と言っています．

⑨敗戦体験の記憶の鮮明さ　体験者の記憶が生々しいのは，ヒロシマやナガサキの被爆者同様に，それが如何に忘れ難いことであり，そして体験者の心の中で絶えず反芻され繰り返されているからです．

(2) 満州移民の戦後体験

満州移民の敗戦体験や難民体験は，「無政府状況下」で繰り広げられた「死と隣り合わせた生の体験」という点で共通性が高いのですが，その後にたどった経路によってかなり異なった人生経路を生きることになります．さきの図2－1に見るように，満州移民の多くは1946（昭和21）年夏から数年のうちに集団引き揚げで国内に引き揚げてきますが，一部のひとは中国共産党や国民党に要請されて不足する看護婦や労働者として引き留められるといういわゆる「留用」で留めおかれ，兵隊として応召したひとのほとんどがシベリアへ抑留され，難民期に中国人家庭に入った人は中国へそのまま残りいわゆる中国残留者となるわけです．

これから以降は，集団引き揚げをしたひとたちと，中国に残ったひとたちを主として話していきたいと思います．

4 日本で想う「満州」—集団引き揚げ者の戦後体験

(1) 満州を想いながらの戦後人生

私は，初めに集団で引き揚げてきたひとたちを中心としてインタビューしてきましたが，非常に驚いたことは，彼らは，統計的に4人家族が大半ですが，その家族4人のうち

1人を亡くし，逃避行や難民体験そしてシベリヤ抑留体験を経ています．自分自身は非常につらい体験を経ていながら，彼らは「満州はよかった」と話すのです.「満州はよかった．出来ることなら，いまでも満州へ行きたいと」．このような話をはじめて聞いたときは，私はショックを受けました．彼らは満州のことをなぜそのようにノスタルジックに思うのだろうかと．その訳は幾つか考えられるでしょう．30歳前後ではじめて家族を持って「人生で一番いい時期を満州で過ごした」ということがまず言えるでしょう．青壮年期を満州で過ごした人も多く，生活水準は高くなくても社会的に恵まれた環境で生活していたのです．満州移民体験者に,「一番つらかった時期は」と聞くと，女の人は敗戦の時期を言いますが，男の人は日本に帰ってきて国内の開拓地に入植した頃が「一番つらかった」と言います．満州では，開墾の苦労もなく自作地主として中国人を使って農業をしていたわけですが，戦後引き揚げてきてから生活が何とかなるまでの5～6年は，文字通り林野を鍬一本で開墾するという文字通り血のにじむような思いをしているだけでなく，地元の農村からは「開拓もん」といってきびしく差別され，本当に辛かったと言います．彼らは1945（昭和20）年から1950（昭和25）年頃までを必死に毎日を生き抜きました．

その毎日の生活のなかでふと我に返った時に，満州のことを思い起こすのです．それは，失った青春である「希望としての満州」の回想であり，その時満州は彼らにとってのノスタルジアであるのです．一方，満州に残してきたり，殺してしまった子どもに対する悲しみやそうなった運命への怒りを思い出します．自分の失ったものに対する悲しみと心の痛みと，怒りと恨みと．怒りや恨みがある人はまだ救われますが，恨みを持てない人たちや，痛みだけが残る人たちは，それをどうやりすごして生きるのでしょうか．集団で入植した人たちは，共通体験がいろいろあり，引き揚げ後も身を寄せ合って生きるわけですので，毎日毎日ある程度お互いを癒しあうことが可能でした．しかし，集団で生きていない人たちは，自分の痛みや，恨みや，ノルスタジアを他の人に言っても分かってもらえないために，他人に満州のことを話す機会がありません．したがって，その人たちが集まり，語り合い，互いに涙を流しあってカタルシスを感じるのです．私がインタビューをする場合でも，話が深く入りこんできた時，語るほうも聞くほうも互いに涙を流す場合がしばしばです．このとき語る人はある程度のカタルシスを感じるでしょうが，本当に分かっている人との間では，当然そのカタルシスの深さ，強さというのは違っているでしょう．このようなかたちで，戦後集団引き揚げで引き揚げてきたひとたちは満州のことを思いながらの戦後を送っているのです．

(2) 集団引き揚げ者の「憂鬱」

死と隣り合った難民期を凌ぎ，引き揚げ後の生活苦から解放されると，戦後社会で「否定された満州にかかわった自分の人生」をどう解釈するかという難問が待ちうけていました．彼らにとって「人生で一番良かった」のは満州時代なのですが,「否定された満州」と係わっていた自分の人生を他人にどう説明するのか，どうすればわかってもらえるのかと,「憂鬱」でした．普通に「満州から引き揚げてきました」と言えば，周りの人は白い目でしか見てくれません．周りの人たちは,「どうせ満州ではいい思いしたんだから」と彼らを非難するわけですから，うっかりと満州の話はできなかったのです．

この難問に対して，いくつかのパターンがありました．すなわち，自分の心のなかにだけ満州のことをしまいこみ，解り合える人とだけ話し「心を閉ざす」ひと．あるいは満州を重要なことだと思わず，自分にも他人にも適当にとりつくろい周囲の視線を「パッシン

グをする」ひと．歴史のうねりのなかで個人の判断などしれている，現在から過去を裁くことは出来ないから,「歴史の脈絡で理解して欲しい」と，満州を時代のせいにするひと．あるいは，自分たちが悪いのではなく，責任をとらない日本社会が悪いのだし,「われわれは加害者ではなく，被害者なのだ」と当時の社会を体制を恨むひと,などがあげられます．

そして，満州を否定するか肯定するかという指標ではいくつかのパターンがあげられます．それは，肯定する人，否定する人，そして苦悩するひとの三つに分かれます.「否定する人」は，社会と矛盾もなく明快です．すなわち，満州は帝国主義による植民地であったとはっきり満州を否定し，そして満州に関わった自分自身も否定するタイプです.「肯定する人」たちは，否定派の意見を気にしながらも,「世間で色々批判するが，満州は理想国家だった」という人や，世間の雰囲気をよく知らずに生きていたり，あるいは無視出来る人たちが満州を肯定します．さらに，肯定派の人たちは，1972（昭和47）年の中国との国交回復を受けて，自分たちは中国発展や日中友好の基礎を築いたと合理化し肯定します．

開拓村というある意味で満州引き揚げ者のカプセルのなかで生きているひとは，みんなでそれを凌ぐことができますが，一般社会のなかでひとりで生きている人たちは，社会との関わりのなかで,「否定された満州」をつよく意識させられ,周囲に心を閉ざしたり,バッシングして自分自身を守るか，自分自身を否定するかしかないのです．通常は心を閉ざしたり，バッシングをして,「出来ることならば自分の忌まわしい過去を消し去りたい」と思っています．周りの人も，自分自身をも欺きたいのです．彼らにとって，満州とはノスタルジアであると同時に「憂鬱」なものでもあるのです．

(3) 「善意の植民地人」とは

集団で引き揚げた満州移民は,「自分たちは本当に満州国の理念にしたがい，理想国家を築きあげようとしていたのだ」とか,「中国人によかれとやった」のだとか,「われわれは，現地人とうまくやっていたんだ」とか,「うちの父親は，現地人に慕われていたんだ」ということをしばしば強調します．たぶん，彼らの言葉に大きな誇張はないでしょう．だが，これらの言説は，A・メンミの『植民地人の肖像』にしたがえば,「善意の植民地人」ということになります．被植民地人からすれば，善意の植民地人も悪意のそれもみな同じ植民地人であったわけですし，善意という個人の意志を離れ，それは植民地という体制維持に貢献するという「意図せざる結果」をも導いていたのです．個々の人間関係と社会体制上の社会関係とは，いわば見えていたものと見えていなかったものでもあるのです．

5 中国で生きる「日本」
—中国残留婦人の戦後体験

(1) 祖国を想いながらの戦後人生

つぎは,「中国で生きる日本」という物語です．これは戦後中国に残った人たちの物語ですが，彼らは戦後，周りの人がみな帰ったなかで，中国に残されたひとたちです．

さて，日系ブラジル人の研究で，前山隆は「女は自分の子供を産んだところが，自分にとっての祖国である」と，だから私たちはブラジルで死ぬんだと胸を張って言う，と伝えています(前山：1984)．一方，中国に残った人たちは，ほとんどが中国を自分の国とはいいませんし，国交が回復した1972（昭和47）年以降に彼らのほとんどが日本に帰ってきました．この違いはどこにあるのでしょうか．日系ブラジル人たちも，日本の敗戦を受けてブラジルに定住することを決意していくわけですが，他方，中国に「残留」した日本人の場合，特に残留婦人と言われる女性たちは，日本人が引き揚げる時に様々な事情で帰国できなかった人たちです．先にのべたように，

彼女らは難民期に「生きるため」に中国人と一緒になったわけです．自分が生きていくために，中国人農家の女中になったり，又，金がなくて普通に結婚できない中国人の男と結婚します．当時の中国ではお金が無いと結婚出来なかったからです．日本人女性は困っており安く買えるので，貧乏人でも結婚できたのです．結婚というより「食わせてやるから来い」という形で，自分の女にしていったのでしょう．そういう訳ですから，自分は中国人の女になったが，「結婚したとは思わない」のです．それは手段にすぎず，「残留も一時的なもの」だと考えていたのです．しかし，皮肉なことに彼女らは日本や日本人から隔絶され，いわば中国社会のなかにひとり隔離されたのです．中国に生きるという決意も，覚悟もなく，ずるずると中国社会に残留を強いられ，「残留の人生」を生きることを強いられたのです．そのために，自分一人が残されてしまったという悲しみや孤独感に打ちひしがれ，自分を売った人たちに対する恨みを抱き，そして日本へのノスタルジアのなかで「中国残留の人生」を生きていったのです．彼らにとっては，夫は日本人の夫しかなく，中国人は一緒に住む人でしかなく真の夫ではありません．しかし，子どもは自分の子どもに他ならなかったのですが．我が子の成長と，日本へのノスタルジアのなかで生きる人生，それが中国「残留」婦人の人生だったのです．

私は当初，集団引き揚げ者を対象として研究をしていましたが，中国に「残留」した人にはじめてインタビューをした時，非常に強いインパクトを受けました．「これは研究しなければ」と強く感じました．集団引き揚げ者の中にある満州への「甘いノスタルジア」と比べ，中国「残留」者のなかにある日本への想いは「血の滲むようなもの」だったのです．

(2) 「残留」を受けいれているか，どうか

しかし，当然ながら，すべての中国「残留」日本婦人が日本への望郷のなかで生きていたわけではありませんでした．最初の10年ぐらいは身を切る思いで中国で生きていましたが，ある程度生活が落ち着いてくると，文化大革命期を境にして，すぐにでも帰りたい人とこれだったら中国に残ってもいいという人に分かれてきます．そのように分かれる彼女らの体験の特性は，以下の4つの指標によって決まるものと考えます．すなわち，表5－1に見ますように，(1)「残留」の経緯が自分で選択したものか，強いられたものかどうか．(2)中国の夫や家族が大事にしてくれたかどうか．(3)中国社会での対応は，同志として扱われ重要な仕事もまかされたか，日本人だからといって辛く当たられたり監視されたか．(4)

表5－1 中国残留日本婦人の体験の特性

特性の項目	「残留」に肯定的状況	「残留」に否定的状況
①残留の経緯	自分で残留を選択	家族の犠牲になった・売られた
②中国の夫・家族の対応	大事にしてくれた・優しくしてくれた	人間として扱ってくれなかった ひどい仕打ちを受けた
③中国社会での待遇・差別	同志と受け入れてくれた 重要な役職も任された	日本人だからと辛く当たられた 監視されてた
④文化大革命期の待遇	それほどひどい仕打ちは受けなかった	街頭に晒され，町中を引き回された．スパイ容疑をかけられた
⑤文革後の中国での状況	恵まれており，現状に満足している．	家族関係も生活も良くなく，現状に強い不満がある．
⑥日本の肉親・親族の対応	帰国を勧める．	帰国を嫌がり，身元引受人になることを拒否する．
⑦中国の肉親の帰国希望	消極的．	日本にあこがれ，帰国を強く希望し，帰国を無理強いする．

（蘭，1994，262頁，表7－1より）

文化大革命期にひどい仕打ちを受けたかどうか，です．

これまで述べましたように，ほとんどの中国「残留」婦人は中国「残留」を受容できませんでした．普通に考えますと，30年も40年も中国にいれば次第に中国的価値に馴染んでいくのではないかと思いますが，「残留」の経緯が「強いられたもの」であったり，家族関係に満足できないものであったために，中国での現実は「かりそめ」で，自分の心のなかにある日本こそが「真実」の生活でありました．彼女らは，「帰れるようになったから帰ろうと思ったのではなく，一日も日本に帰ることを思わない日はなかった」のです．もちろん，日々の生活は眼前の中国での生活を受け入れざるを得ませんでしたが，心のなかでは，あくまでもそれを受容できていなかったのです．それゆえに，中国での現実は「かりそめ」のもので，自分の心のなかにある日本こそが「真実」の生活だと考えることによって自分のリアリティとアイデンティティを維持してきたのです．一方，受容する人たちは，数は多くありませんが，「残留」の経緯が主体的であったり，家族との関係もよく，中国社会で受容され，文化大革命期もなんとか乗り越えてきたと実感できる人たちです．

(3) 祖国日本への帰国
——「新たな物語」のはじまり

さて，国交回復後大半の中国残留者（中国残留孤児と残留婦人）は日本に帰国しました．しかし，祖国日本に帰ってきたことによって，新たな物語がはじまります．永い望郷の果ての帰国でしたが，彼らの祖国への想いと，祖国日本の受け入れ姿勢との間に齟齬があったのです．日本政府は，彼らが「日本人である」から帰国を受け入れたのであり，日本人なのに日本語が喋れない，日本人なのに中国的であるという，「日本人のくせに～」と「日本人になること」を強要する性急な同化圧力で，受け入れ側と帰国者の間に数多くの軋轢が生じてきます．ですから，彼らの帰国する前に日本について想っていた幻想は，現実に帰り生活し多くの軋轢を経験していくなかで日本への幻滅へと大きく変わっていくのでした．皮肉なことに，彼らは，中国にいた時は「日本人と言われ」，日本に帰ってくると「中国人と呼ばれ」て生きざるをえない状況になったのです．そこには，「日本人か中国人か」というエスニック・アイデンティティの問題が生じてきます．

中国から帰国してきた中国残留者は7千人ほどで，その関係者を含めると現在は10万人位といわれています．彼らは戦争被害者で中国からの帰国者という独特の背景を持つマイノリティゆえに，帰国後の日本社会で様々な問題にぶつかります．たとえば，日本社会への適応（あるいは再適応）は簡単ではありません．同化圧力にたいしても，非常に強く過同調する人とそれから逸脱する人がいて，適度な適応がなかなか出来ません．逸脱の場合でも，ポジティブに逸脱する場合とネガティブに逸脱する場合があり，ポジティブに逸脱する場合は日本や中国という国民国家を超えていきます．ネガティブに逸脱する場合は，逸脱集団として暴走族になったりと，様々な状況が生じており，いわゆる新来の外国人労働者でもなく日系ブラジル人でもない「祖国への移民」という興味深い状況にあります．

帰国者の話を聞いていると，「祖国」だけでなく「家族」も物語の中心にあります．中国残留婦人，中国残留孤児というのは，戦争によって「家族が離散」させられ，そして帰国することによって再び「家族が（日本と中国に）離散」させられます．しかし，後に呼び寄せという形でもう一度「家族は再結合」されます．しかも，帰国の動機は，1993年の「強行帰国」に象徴されますように，どうしても「祖国に帰りたい」という「純粋」なものから，このまま中国に留まりそこで人生を終えたいと願っていたが，折からの出国熱に煽られた

孫や子どもたちの社会経済的な動機にしたがって日本に帰国するものまであります．後者の場合，泣きながら「家族のために」と中国に「残り」，1950年代の最後の引き揚げの際も「子ども」のために帰国を諦め，そして今度も三たび「家族のため」に日本に帰国してくる人もいるのですが，彼らは，日本と中国という国民国家と家族によって翻弄された人生を生きているのです．しかし，家族のために帰国しても，帰国後の家族はマイノリティの家族として，強力な結合モメントがあるだけでなく，コミュニケーション・ギャップと生活体験の極端な違いによって解体モメントにさらされてもいるのですが．

また，中国帰国者といってもそれが残留婦人とその家族なのか，あるいは残留孤児とその家族なのかによってその状況は異なりますし，それぞれ個々人のサブ・カテゴリーによってもその状況は異なり，問題はそれぞれ様々ですが，ここではこれ以上ふれません．

私はこのような研究をずっと続けてきましたが，これらのさまざまな研究課題にぶつかるたびに，満州移民および中国帰国者に関する研究は社会学の研究としてじつに豊かな可能性のあるテーマだと考えています[20]．

6 満州移民研究の方法

(1) 基本的視点と研究の方法

①満州移民研究の基本的視点 私の基本的視点は，(a)仮説命題調査ではなく，出来るだけ実態を精確に把握し叙述しようとするものです．I・トーマスとF・ズナニエッキの『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』(1918－20)（以下『ポーランド農民』と略す）を片目でにらみながら，満州移民のモノグラフ的な研究を目指したのです．また，(b)研究対象としての満州移民を，1932（昭和7）年から1945（昭和20）年までに限定せずに，移民事業が崩壊した1945（昭和20）年以降から今日（1998年）までの期間を対象とします．つまり，移民事業に参加した満州移民の「満州移民体験」だけでなく「戦後体験」をも含めた，彼らの今日までの人生を「まるごと」対象としようと考えたわけです．そして，(c)彼らの「満州移民体験」がその後の彼らの人生経路（ライフコース）にどのような影響を与え，今日それを主観的にどのように解釈しているのかという彼らの主観的に「生きられた世界」を明らかにすることを目的とします．しかし，この場合注意すべきことは，あくまでも体験者本人が主観的に語る「満州移民体験」を重視するのであって，客観的な歴史ではないということです．さらに，(d)満州移民体験者を戦後の人生経路によって分類し，その比較によって満州移民体験者の社会学的特質を明らかにすることです．具体的には，集団引揚者，中国残留者，そして中国帰国者を大きなグループとし，さらにそのサブグループごとの特質を比較研究するのです．そしてもちろん，(e)彼らの組織する集団やその社会関係の特質を明らかにすることは言うまでもありません．

②社会学的視点 本研究は，社会学のどこに位置づけるかは難しいですが，以下のようないくつかの視点を利用したごった煮なのです．まず，歴史的事象を社会学の対象とするという歴史社会学の視点，農民，農業，開拓村，村落共同体という農村社会学の視点，祖国という問題やナショナル・アイデンティティを考える国民国家論，満州国における異民族体験や「民族協和と民族差別」を考察する脱植民地研究，中国帰国者の適応とアイデンティティを考えるエスニック研究，戦争体験や戦後体験を分析する戦争体験論，などという諸視点です．

③調査方法 満州移民を研究する方法としては，これまでの記述からもおわかりと思いますが，基本的には，ひとつの方法のみに準拠せずに，農村調査法から集団分析，アンケート調査，そしてライフヒストリー法や参与観

察法まで，満州移民の「生きられた世界」を知るために有効と思われた方法を使い，いわゆる「恥知らずの折衷主義」(佐藤郁哉(1992))と言われる態度をとってきました．しかし，そうは言っても，研究が進展するに連れて，それらの方法のなかでもライフヒストリー法をその中心的な方法として用いるようになりました．私の研究の基本的視点が，体験者本人が主観的に語る「満州移民体験」を重視することからも，それは必然の結果と言えることなのですが．

7 ライフヒストリーという方法

(1) ライフヒストリー法の「復権」

さて，ライフヒストリーという「質的で歴史的」な方法は，今日ほど洗練はされていませんが，社会学の古典のひとつである『ポーランド農民』をはじめとして，シカゴ学派の都市調査の頃から用いられてきた伝統ある方法です．しかし，それは，戦後のアメリカ社会学において理論的には機能主義，調査法としては統計的で数量的調査法が主流となるにつれて，日本においても社会学の調査法から姿を消していきます．アメリカは，戦後の日本社会に様々な戦後改革をもたらしましたが，日本の社会学にも大きな影響を与えたのです．日本社会学における戦後改革のひとつは，社会調査法の抜本的な改革であり，それはそれまでのフィールドを歩き回った経験豊かな社会学者の経験や「勘」に頼る質的な調査法から，仮説命題にもとづく質問紙調査法とその数量的な処理という「科学的な調査法」へと転換が行われたことです．もっとも，この転換も，階層研究を中心とする数理社会学の飛躍的な発展をもたらしましたが，それ以外の一般的な社会調査ではなかなか徹底されませんでした．それは，基本的な統計的手法も教えない日本の社会学教育の貧困さの現れなのですが．それはおいとくとして，日本の社会学においても，実際は別にしても，理念的には統計処理を前提とする数量的な調査が「科学的な方法」として，その正当性を与えられてきました．

このような状況に風穴をあけたのが，あの有名な1980(昭和55)年の中野卓の日本社会学会会長就任講演であり，それにもとづく「個人の社会学的調査研究について」(中野：1981)という論文です．もっとも，アメリカにおいてはすでにそれよりはやく，シンボリック相互作用論や現象学派，そしてエスノメソドロジーなどのいわゆる意味学派による機能主義批判が生じ，グランドセオリーとしての機能主義がゆらぎ，社会学におけるパラダイム転換が行われようとしていました．また，歴史的な視点がアメリカに比べて強かったヨーロッパの社会学においては，歴史的な視点はずっと維持されていましたし，1978年の第9回世界社会学会では生活史の特別部会が開かれ，またW・フックスによって西ドイツ社会学における「人間の全生涯を対象とした」研究の高まりを「生活史(研究)のうねり」という表現で紹介されているほどです(水野：1986)．このような欧米における研究動向の影響は，もちろん日本にもおよび，機能主義全盛から意味学派を加えたミニ・パラダイムの競合期へと転じ，筒井清忠編(1990)『「近代日本」の歴史社会学』や落合恵美子(1989)『近代家族とフェミニズム』それに戦時下日本社会研究会編(1992)『戦時の日本―昭和前期の歴史社会学』をはじめとする歴史的な研究(歴史社会学)が「復権」し[21]，調査法においても質的方法，なかんずく生活史研究(ライフヒストリー法)やフィールドワーク法が注目されてきたのは周知の通りです．

(2) ライフヒストリー法の前提と特質

ライフヒストリー法について簡潔に説明していきましょう．まず，中野・桜井の定義にしたがい，ライフヒストリーとは，「インタビューという相互作用をとおして生み出された口述の自伝的語り」とし，このようなライ

フヒストリーを生み出すインテンシヴなインタビューと「分厚い記述(thick description)」がその方法の中心にあります.

では,この方法の前提はと言えば,それは,まず,(a)リアリティは生活の当事者によって構成されること,(b)観察者は外部からではなく当事者の内的視点に立つことによってはじめてこのリアリティを把握できることなどです.ですから,この方法では,「科学的な調査法」が目指す客観的で因果関係の把握よりも,(c)生活の当事者たちを現実に支配している意味の把握を目指すことなのです.そして,(d)この方法は普遍的な一般化法則を目指すのではなく,各々の個性や状況の特性の把握を重視しそこを支配している当事者の意味世界を把握することなのです.したがいまして,(e)調査・研究は価値自由ではありえず,自らの立場・評価を明確にする必要があること,などがあげられます.

先の定義に明らかなように,ライフヒストリー法の最大の特徴は,調査者と被調査者との相互作用的な共同作業にもとづく作品であるという点です.従来の社会調査法では,調査の主体は調査者で被調査者はその客体にすぎず,両者の役割関係は固定化されています.ですが,ライフヒストリー法では,主体と客体の役割関係は固定化されず流動的なのです.ライフヒストリーは,語り手が一方的に語ったものをまとめただけのものでもなく,聞き手の質問項目へ被調査者が回答したのを再構成しただけのものでもないのです.聞き手はあらかじめ語り手の意味世界をうまく引き出せるような質問群を考えていますが,語り手の話の展開は往々にして聞き手の予想に反してあるいは超えて展開したり,それもアドホックであったりします.そして,そのような語りから,聞き手の予想もできなかった「意外な意味世界」が展開されるのです.この意外な意味世界の発見こそが,この方法の醍醐味のひとつなのです.

もちろん,インタビューの当初からこのような展開は望めません.最初は,通り一遍の質問とそれに受動的に応える被調査者という主体と客体の役割関係が固定化されたものでしかないでしょう.ですが,時として被調査者は,単に聞き手の質問に答えるだけの存在すなわち単なる情報提供者から自ら主体的に語り出す存在へと移行するのです.このチャンスを逃すことなく,主体的な語りをさらに引き出すようなインタビューへと切り替えていくのです.そうして,聞き手は語り手の語りに刺激されて質問し,語り手は質問に刺激されて語るという相互作用的なインタビューへと転じていくのです.通常の場合は,このような主体的な語りは,調査項目から外れて時間を食うだけの「余計な雑談」としてただ聞き流されるか,遮られることが一般的でしょう.私も,この方法に馴染むまでは,こちらのスケジュールからはずれる「余計な雑談」に苛立ちながら気のない相づちを打つだけでした.しかし,聞き手が予想もできないようなリアリティはこの主体的で饒舌な「雑談」にこそこめられていることが多いのです.

また,思いもしなかったことが発見されるのは,聞き手だけではなく語り手にとってもそうなのです.語り手は,聞き手に語ることによって普段は忘れてしまったことや意識の底にしまいこんでいた事柄や想いを語るにつれて次第に思い出していくからです.聞き手に触発されて語り,語ることによってひとりでは気づかなかった過去の自分やあるいは自己の本来の意味世界を再発見するのです.語り手と聞き手は,語り手の意味世界に「共に」旅立ちそこをさすらい,語り手は過去を語っていく過程で過去の自己と会話し過去の自己を確認し癒しあるいは現在の自己から過去の自己を捉え直したり過去の自己から現在の自己を見つめ直していく契機となるのです.他方,聞き手は語り手の意味世界を追体験することによって,単に語り手の意味世界をうま

く作品に作り出すだけでなく，聞き手との共感あるいは時として反感や論争のなかで人生というものの意味を考え社会というものを考察する機会を得るのです．聞き手は，一回の人生しか生きれないのですが，深いインタビューをとおして様々な語り手の人生を追体験し考察し解釈するなかで，様々な人生を擬似的に生きる機会を得るのです．このようなことが，「語り語られる」という関係のなかで生じてくるのです．このような意味で，ライフヒストリー法は相互作用的で共同的な作業だ，というのです．

もっとも，この点はいい意味だけがあるわけではありません．相互作用的であるために，ライフヒストリーの作品は，聞き手と語り手のそれぞれの個性によって，そしてその組み合わせによってずいぶん異なってきます．たとえば，被調査者の個性，とりわけその表現力が作品の成果に大きく影響しますし，「聞き手が内蔵しているもの以上は何も聞きだせない」と言われるように，聞き手としての想像力や語り手の語りを触発する魅力によって，語り手の語りの深さも変わってくるのです．たとえば，満州移民体験者のところに学生と一緒にインタビューに行きますが，私に語る話と，学生に語った話は違ってくる場合が多いのです．若い学生を相手に話すのと中年の大学教師に話すのとでは，語り手の語る内容に違いがでてくるのはある意味で当然でもありましょう．また，50人位の大勢の前で語るのと，一人のひとに語るのでは話の内容に違いがでてきます．つまり，ライフヒストリーの語りは聞き手との相互作用ですので，語り手だけでなく聞き手によっても語りが変わるのは当然なのです．すなわち，ライフヒストリー法は聞き手の研究者としての力と同等かそれ以上に人間としての力が問われる方法といえるのではないでしょうか．では，若い研究者や大学院生はライフヒストリー法を行えないかと問いますと，それは違います．問われるのは，年齢や経験だけではなく，語り手と向き合う研究の姿勢であり，その背後にある生きる姿勢ではないでしょうか．

(3) ライフヒストリー法の立場の違い

さて，ライフヒストリーは良くも悪くも標準化されておらずその統一的なものはありません．それは，桜井や西村が言うように，幼年期から現在までの個人が語るライフヒストリーを題材とし，その主観的意味世界を考察するという共通認識以外に標準化されたものはないと言っていいでしょう．ですが，そのスタンスにはいくつかの立場が見てとれます．先ほど申しましたように，ライフヒストリー法はいわゆる実証主義にもとづく仮説命題式の統計的調査を前提とする「科学的な社会調査法」への批判から見直され「復権」してきた方法ですので，おのずとそれはこの実証主義や「科学的な社会調査法」との関係から，その立場が測られるのです．それにもとづいて簡単に分類するならば，(a)その客観性を重視する立場，(b)語り手の主観的な世界を聞き手が解釈的に再構成する立場，そして(c)語りそのものを重視する立場，の三つの立場があると言えるのではないでしょうか（桜井：1995，西村：1999）．すなわち，(a)は従来の実証主義的な社会調査を本質的には批判せずに，その補完としてライフヒストリー法を位置づける立場です．社会学では社会を分析対象の中心におくあまりに個人を捨象してきた従来の傾向を批判し，個人を社会学の対象とすることを主張する立場です．(b)は仮説命題にもとづく「科学的調査法」はもちろん実証主義自体を批判し，社会調査のオールタナティブとしてライフヒストリーを位置づける立場です．そして，(c)は実証主義をよりラディカルに批判しています．(b)と(c)の違いは，私は勉強不足でよくわからないのですが，(b)は語り手の主観的世界を重視し研究者の主観による解釈を認めていながらも，聞き手で書き手としての研究者の観点をはっきりと意識

し，実証主義とは異なる科学を目指していると考えています．しかし，(c)はもっとラディカルに，科学というもの自体を突き崩すモメントを模索し，それを語りのなかに求めている立場と言えるかもしれません．

では，ライフヒストリー法のなかにある立場の違いをもっと解りやすくするために，ライフヒストリーと「類型化」の関係を見ていきましょう．すなわち，作品としてライフヒストリーをまとめあげるときに，それを社会学的な類型化と結びつけるかどうかという問題です．たとえば，谷富夫や青木秀男は，ライフヒストリーの類型化を非常に重視する立場にあります(谷：1996, 青木：1996)．谷は，仮説索出と類型構成がライフヒストリーの重要な強みであり，それを踏まえて「法則定立的研究」が可能であるとのべています．また谷は，「データとしてのライフ・ヒストリーには代表性や客観性が欠けるとの批判があるけれども，個別を通して普遍にいたることは可能であり，個性記述の蓄積を通して類型構成への道が開かれている」(同上)と，従来の実証主義的な研究を批判せずに，「ライフ・ヒストリーなどの質的データと量的＝統計的データとの相互補完によって，より豊かな研究成果を生み出すことができる」(同上)とライフヒストリーを従来の方法の補完的なものとのべています．ライフヒストリーを類型化し法則定立へと志向するのが谷の立場なのです．じつは，谷富夫が編集し私も書いているこの(1996)『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』(世界思想社)は3年間でもうすでに3刷りまでいっておりよく売れているようですが，これはこの谷の実証主義寄りの立場が一般の社会学者に受け入れやすく，入門書的な「教科書」として「無難」であると考えられているからでしょう．一方，中野・桜井編の(1996)『ライフヒストリーの社会学』(弘文堂)は，その立場にやや幅がありますが，内容自体もライフヒストリーに関する最先端の議論がされた応用編で，従来の実証主義的な社会調査をラディカルに批判する骨太の本です．そして，ここではもっとライフヒストリーの語りにこだわり，そこでは類型化は目標とはされていません．

また，類型化ほど実証主義的ではありませんが，個人を「社会的カテゴリー」のなかに位置づけることによって，ひとつのライフヒストリーをまったく個別的な事例ではなく，ある種の「代表性」を得ようとすることがあります(桜井，同上書)．私の研究する「満州移民」も他ならないひとつのカテゴリーであり，「中国帰国者」もそうなのです．わたしは，満州移民や中国帰国者をさらに下位のカテゴリーに分類し，個別のライフヒストリーをその典型として位置づけようとしてきました．しかし，それらを類型化までは志向しませんでした．それは，結果として，そうするには対象が大きすぎてなかなかそこまで行けなかったためで，最初から批判的にそれを避けたわけではありません．いまだに，このテーマで発表すると，必ず最後に「何故類型化をしないのですか」とか，質疑の後に「このように類型化できませんか」と親切にもお教えいただくことがあります．多くの社会学者にとって，「満州移民」のことは面白くても，最後に類型化されないと落ち着かないのでしょう．

(4) ライフヒストリーへの批判と反批判

繰り返しになりますが，私は，ライフヒストリーとは，「科学的な調査法」が目指す客観的で因果的な関係の把握よりも，当事者の現実(reality)を支配している意味を把握することだと考えています．つまり，この研究の方法は，普遍的な一般化法則よりも徹底的に個別の状況や特性を把握することを目的とします．しかし，これは，いってみればオーソドックスな社会学から見れば様々に批判されます．たとえば，ライフヒストリーは，妥当性も，信頼性も，代表性もなく，社会調査の

科学的基準を満たしていない．また，個別の事例を100例集めても，一般化出来ないなら意味がない．そして，過去はしばしば現在にフィットするように構成されるから，語られる過去は事実ではなく客観性がない．さらには，ライフヒストリーは実際の生活世界と乖離したハイ・ストーリーである．したがって，生活世界の把握を目指しながらそれと乖離しているハイ・ストーリーを対象にするのは方法的に問題である，等々の批判です．

これらの批判に対して，ライフヒストリーを研究する側は，先に述べてますように，実証主義の批判を先取りしてそれに応じる人から，これらの批判に反批判するひとたちもいます．私は，一応数理的な分析もしましたし，最初は実証主義に近いライフヒストリーから出発しましたので，実証主義の批判も「理解」できます，しかし，実証主義の言う科学性の欺瞞性をよく考え直す必要もあります．たとえば，アンケート調査でデータ集めをする場合にどれだけ客観的に行なわれているのでしょうか．そもそも仮説命題にもとづいて調査票が現実を掬いあげているのか，バイアスがかかっていないのかと．そしていったんその調査票へ回答がなされたらそれはデータとして客観的なものと信じられているがはたしてどうか．さらには，コンピュータによる数量的な処理は科学的なのか．たとえば，数理社会学会での議論で，同じデータを使いながらも正反対の結論が出てくることをどう考えればいいのかという議論がなされたことを思いだしてほしいですね．調査票と計量分析による科学的実証主義の限界を十分踏まえておくべきでしょう．

また，代表性に関しても，ふたつの反批判が可能でしょう．ひとつは，「個人的なことは，普遍的なんだ．徹底的に個人的にこだわることで普遍的な社会が見えてくる」という視点です．だからライフヒストリーを研究することで，徹底的に個人的な事情を見ていっても，その個人の背後にある普遍性を視野に入れていないライフヒストリーは意味が無く，それを視野にいれているライフヒストリーは作品として非常にレベルが高いと言えます．また，グラウンディッド・セオリーで有名なアンセルム・ストラウスは，私が「代表性は，どうしたらいいのか」と質問した時，「大事なのは統計的な代表性ではなく，概念の深さによる概念の代表性を考えなさい」とアドバイスしてくれました．統計的な代表性にかわる概念の代表性にこだわるというのが，私の立場です．

さらに，語られた歴史をどう見るかという点です．「今日の視点」から体験者によって再構成された過去を見るという方法は，「語り」自体に客観性があるかという問題と，「今日の視点」で語られることの問題という2つの論点が含まれています．語りの客観性についての批判は，「公文書は事実であるという実証主義史観」（上野千鶴子：1998）にもとづくものですが，この場合も公文書が書かれた政治性を見れば，「客観的な歴史や資料」は存在するのかという反批判ができるのです．

私も満州移民研究をやりはじめた当初は，実証主義的な歴史観にもとづいてはじめたわけで，オーラルヒストリーは歴史的な客観性が大切で，それは歴史の資料的な価値があるという実証主義的な歴史観にしたがっていました．しかし，ライフヒストリーの方法にはいりこんで研究をすすめていくにつれて，次第に，いわゆる客観的な歴史とは異なる次元の「生きられた歴史」へと関心が移っていったのです．つまり，どう語るかではなく「何故語るのか」を考えて解釈することなのです．そして，社会的意味づけと個人的意味づけの違いや関連をどう解釈し分析するかがポイントになるのです．

また，「今日の視点」からなされる語りの問題は，過去が現実にフィットするように構成されがちだからです．つまり，ライフヒスト

リーのような現時点での回想法は，語り手の現在の視点・価値観によってバイアスがかかるという批判です．しかし，最近「自由主義史観」を中心とする「歴史の再審」論争にも明らかなように，現在の視点から過去を構成するのは，ライフヒストリーのような小文字の歴史だけでなく，「正史」といわれる大文字の歴史においても現在の視点から過去が「再審」されているのです．すなわち，歴史とは「現在における過去の絶えざる再構築」であり，ただ一つの歴史的事実などないのです(上野：同上書)．すなわち，この2点を踏まえて今風に言えば，私は，実証主義的な歴史観ではなく，社会構築主義的な歴史観にもとづいていると断っておきましょう．

最後は，ライフヒストリーはハイ・ストーリーであるという批判です[22]．ライフヒストリーというハイ・ストーリーは実際の生活世界と乖離しているという批判は，非常に厳しいものですね．この批判は現在のところもっとも乗り越えがたい難しい問題です．ライフヒストリー法は，今後この難問をどう処理していくか検討していくべきでしょう．

8 おわりに
—満州移民研究へのノスタルジアとプロスペクト

(1) 方法について

さて，最後にここで少し恨み辛みを告白しましょう．1980年代に満州移民研究をはじめたころは，かなりシンドイ時期でした．シンドサの大半は，私の研究者としての未熟さによりますが，満州移民という対象が社会学で自明ではなく，そのことについてつねに「説明」を求められる重圧感からくるものでした．たとえば，「いま何を研究しているのですか？」と聞かれて，「満州移民です」と答える度に，「満州移民！ それなんですか？」とか，「へーいまごろ満州移民，しかも社会学で，それでどんな意味があるのですか？」とか，「そんな歴史的なものを社会学でどうやって研究するのですか？」とか，「研究の仮説は何ですか？ え，仮説なしで調査しているのですか!?」等々といった否定的で批判的な質問．学会で発表しても，「君の研究には理論的な枠組みがない」とか，「事実は面白いが，検証する仮説がない」とか，「ライフヒストリーを集めて何になるのか」などの批判，それ以前の黙殺．いまになってみれば，このような常識的な質問や批判に対して苦しむことはほとんどないですが，当時はまだ私も駆け出しの頃ですから，ずいぶん悩みました．「こんなことやっていて，一体何になるんだろう？ 果たしてものになるのだろうか」と．そして，研究は進めていきましたが，学会には出なくなりました．そこで「説明」を上手にする自信がなかったからですし，惨めになるのがいやだったからです．しばらく批判から逃げてフィールドを歩き回りデータ収集に熱中しました．しかし，ここで一歩踏み留まり，「もっと積極的に打って出て議論や論争をすべきだった」と反省しています．

それに，「もっと社会学の勉強をしておくべき」でした．そうしていたら，私の研究はもっとおもしろいものになっていったはずなのですが．

一生懸命に調査をしましたが，データにもとづいて叙述すると主張しながら，結局は自分のなかにある中途半端な社会学の概念でこの研究を切ってしまったのです．徹底的に事例に沈潜していたかったのですが，浮かびあがってくる時にどうしても社会学的なタームを中途半端に使ってしまって，研究の面白さが半減していると批判されても仕方がありません．反省的に言えば，フィールドワークをもっと緻密にし，そしてきっちりとノートをとったりテープをきっちりとトランスクリプトに取り，データに徹底的に沈潜し，一方では，社会学の諸研究をじっくりと読んで，自分の研究の持つ社会学的な含意をはっきりと見定めていくべきでした．

(2) 満州移民研究のプロスペクタ

最後に，私の満州移民研究（中国帰国者研究も含めて）のプロスペクタ（prospecta）について簡潔に述べて，報告の終わりにします．

①満州に移住することによって，満州移民体験者はいかなる体験を経て，そしてそれを今日どのように解釈し構成しているのか．たとえば，植民体験とその裏返しとしての敗戦体験，極端なマジョリティ体験とマイノリティ体験をどう解釈しているのか．また，中国という異文化で「敵国人」として生きること，そして中国文化という異文化での「残留」体験は中国残留者にどのような影響を与えたか．さらには，国家や民族や集団や家族というカプセルから放り出され，極限を生きることによって，彼らは国家や民族と個人の原初的な関係をどのように直感しているのでしょうか．

②満州体験の根底にあるのは，「植民地的状況下での敗戦体験」です．この体験を経た彼らの根底には，無常観，「カオスこそ世界の根底だ」という世界観が形成されます．そして，国家と個人の原初的な関係を直感することによって，「戦争はやってはいけない」という平和主義と，その表裏としての「戦争は負けてはいけない」という国家主義を生み出します．

③戦後「否定された満州にかかわった自分」をどのように位置づけているのかという問題は，特に集団引き揚げで引き揚げた人たちにとっては難問でした．それは，植民地でない「理想国家満州国」と「戦後否定された満州国」の落差をどう解釈するかという難問との対決でした．

④満州移民体験者は，満州体験と戦後体験をどのように克服し思想化しているのでしょうか．彼らは，体験を克服し思想化して，その国家観や戦争観と人生観を形成するのです．この場合も，一方では「自己と国家の同一視」を，他方ではその対極としての「自己と国家の分離あるいは超克」です．

⑤満州移民体験者の生活世界自体が興味深い対象ですが，満州移民体験者に映し出される戦前と戦後の日本社会もまた興味深い研究対象でしょう．とりわけ，中国に「残留」し，戦後40余年後に「帰国」してきた中国帰国者の体験から透かしてみる国家と個人，そして日本という国家と日本人の姿は極めて興味深いものでしょう．

以上，長時間の御聴講，大変有り難うございました．

〈付記〉

本稿は，1999年2月27日に札幌学院大学社会情報学部で開かれた「社会情報調査の方法に関する研究会（第12回）」において発表した原稿に加筆修正したものです．発表の機会を与えていただいた札幌学院大学の井上芳保先生をはじめとする研究会の皆さまと，当日3時間以上にわたって熱心に聴講いただき，適切なコメントをいただいた諸先生および学生の皆さまに心からお礼申しあげます．なお，本稿は基本的には発表原稿を起こしたものですし，当日の発表の雰囲気を伝えるためにも，原稿は「ですます」調をとっています．一般的な，学術論文とはスタイルは異なりますが，御海容下さいますようお願いいたします．

〈注〉

(1) 戦後における満州移民研究は，浅田喬二らの満州移民史研究会編(1976)『日本帝国主義下の満州移民』龍渓書舎，と山田昭次編(1977)『近代民衆の記録 6 満州移民』新人物往来社，というふたつの研究を契機としています．その後も，浅田らの歴史的な研究が着実に行われています．しかし，社会学における満州移民の研究は，私が(1994)『「満州移民」の歴史社会学』行路社，で着手するまで手つかずの状態でした．私の研究の特色は，浅田らの研究があくま

でも実証主義史観の立場で1930年代当時の満州移民事業に関する歴史的な分析を行うのに対して，満州移民事業よりも満州移民個人を，1930年代だけでなく満州移民体験者の当時から今日までの人生航路（life-course）を対象とし，さらに，いわゆる社会構築主義の立場から当事者の体験に焦点を当てて，当事者の意味世界を明らかにしていく点で際だっている，と考えています．

(2) 満州移民研究における社会学的方法の可能性は，注(1)で述べましたように，歴史的な事実についての実証主義的な研究ではなくて，当事者の意味世界を対象としそれを詳細に記述していく点にこそあると考えます．歴史社会学的なアプローチといっても，実証主義的なスタンスをとれば，社会学の持ち味は出づらいと考えています．構築主義的な視点にたって，当事者の意味世界に迫る研究方法によってこそ，その可能性は拡がるでしょう．それによって，はじめて歴史的な領域での社会学のオリジナリティが発揮されるのではないでしょうか．

(3) 「満州国」は，現在の中国東北地区に1932（昭和7）年3月1日から1945（昭和20）年8月18日まで存在した「国家」です．その位置づけとしては，「一九三一年九月，満洲事変を起こして中国東北部を占領した関東軍が，翌年清朝最後の皇帝溥儀を執政（三四年に皇帝に即位）に立てて作り上げた国家．国防，政治の実権は関東軍が掌握し，日本の大陸進出の軍事的・経済的基地となった．一九四五年，日本の敗戦により崩壊した（中略）日本ないし関東軍の傀儡国家」（山室，1993，6頁）という山室信一の説明が一般的で妥当なものではないでしょうか．ここでは，その傀儡性を示すために「満州国」と括弧つきで用いています．

(4) 中国「残留」という言葉には，彼らが「主体的」に中国に留まったというニュアンスがこめられています．しかし，彼らの「主体性」とはその本来の意味での主体性ではなく，そうせざるをえない状況において選択されたという意味での「強いられた」主体性でしかなかったのです．井出（1986）は，この中国残留という日本政府の公式な用語に，政府は彼らの「残留」にいたる経緯への自らの責任を逃れるような用い方をしているが，それは本来の意味での「残留」ではなく「棄民」だったのだと，政府の用法と姿勢を厳しく指弾しています．本書でも，井出にならい，このニュアンスを示すために「残留」と括弧つきのままで用います．

(5) 国民国家論は，西川長夫の論考によっています．たとえば，西川（1992）『国境の越え方』筑摩書房，同（1995）『地球時代の民族＝文化理論』新曜社，同（1998）『国民国家論の射程』柏書房）など，です．

(6) ポストコロニアリズム（postcolonialism）的な視点は，E・サイード（1978＝1986）『オリエンタリズム』をひとつの契機として世界的にひろがり1990年代の思想・文化研究の主流となっています．大橋洋一の明快な説明によれば，ポストコロニアリズムとは，「植民地時代以後」と「植民地主義とその現代に至るまでの余波」というふたつの意味で用いられているとのことです．前者は，被植民地であった地域や国々の独立以後の文化思想的状況や社会変動をさし，移民や難民による民族移動や民族の混淆から生じた文化のクレオール化やハイブリッド化や，独立後も先進国の支配下にある状況などを対象としています．後者は，啓蒙主義時代以後の歴史を西洋とその他者との間にある支配と抵抗の歴史として再認識し，西欧の帝国主義的な思想ならびに民族主義への批判的姿勢にもとづく研究です．（大橋，1998，1491頁）日本においても，この視点は大きな影響を及ぼし，たとえば，『現代思想』（1996年3月）「特集，カルチュラル・スタディーズ」，複数文化研究会編（1998）『〈複数文化〉のために』，姜尚中（1996）『オリエンタリズムの彼方へ』などの興味深い考察を生み出しています．

(7) 「恥知らずの折衷主義」とは，シカゴ大学のジェラルド・サトルズの提唱する方法論である

が，日本では佐藤郁哉(1992)『フィールドワーク』によって紹介されてひろがっています．それは，ひとつの調査法に固執せずに対象を明らかにするのに便利で有効な方法は併せて用いようというスタンスをさしています．

(8) 「満州国」についての研究は，1990年代に入ってから大きく展開しています．たとえば，山本有造編(1993)『満洲国の研究』京都大学人文科学研究所や山室信一(1993)『キメラ－満洲国の肖像』中央公論社，沈潔(1996)『「満洲国」社会事業史』ミネルヴァ書房，安富歩(1997)『「満洲国」の金融』創文社，塚瀬進(1998)『満洲国「民族協和」の実像』吉川弘文館，などがあげられます．

(9) 井上ひさしは，ジャーナリストが，現場を取材する前にすでにある種のイメージでもって定義してしまい，そしてそれでもって現場を見ていることを厳しく批判しています．ですが，このことは社会学にも当てはまるのではないでしょうか．ある種の専門的な概念でもって現場を切ってしまうことが往々にしてなされているのです．(井上ひさし(1993)「新しいジャーナリズムを創る」『月刊金曜日』通巻1号)

(10) 「民族協和」は，「満洲国」の建国に際して，建国の理念のひとつとして用いられた概念です．それは，基本的には，当時世界的な流れとしてあった「民族自決」による「対立」ではなくたとえばアジア民族という民族間の同質性にもとづく「協和」を称える超民族という理想主義的な理念です．民族自決という理念は，第一次世界大戦後に世界を風靡しましたが，これは，朝鮮での三・一万歳事件や中国における五・四運動に代表されるように，東アジアにおける反日・抗日の民族運動にも多大な影響を与えました．これに対して，民族主義と植民地支配を対決させるのではなく，むしろ日本による植民地支配が民族自決を押さえ込む民族支配ではなく，東亜民族間の協和を生み出すものであるというイデオロギーを生み出したのです．もっとも，これは，孫文の革命運動において漢民族だけではなく中国諸民族の統合が必要であることを示す理念としてもたらされた「民族共和」概念からヒントを得たものです．ある意味で，民族自決は20世紀初頭の近代的な理念ですが，民族協和はそれを超えたポストモダンな理念ともいえましょう．ですが，如何せん，その概念の理念と現実の乖離(どう猛な植民地主義)がはなはだしかったことはいうまでもありません．ちなみに，一般には，「五族協和」という言葉で馴染まれていました．五族とは「満洲族，漢族，蒙古族，朝鮮民族，日本民族」のことをいいます．

(11) 満蒙開拓青少年義勇軍とは，青少年を対象として開拓地での将来の幹部を養成するために1937(昭和12)年に設置されたものです．これは，一般の開拓民の対象が兵隊として動員されたり，あるいは戦争景気による満州熱の冷え込みによって満州移民の希望者が減少していったので，事業計画を遂行するために青少年で代替しようとする制度です．

(12) 大恐慌に発する1930年以降の農村恐慌は日本の農村に多大な被害を与えました．たとえば，当時の農家の主要産物であった繭価は1930年のそれは最盛期の1918年当時の20%程度へと落ちこんでいましたし，1931年の農家収入は自作農も小作農も1925年当時の40%に落ちこんでいたのです．この窮状を打開するために，農林省は経済更正運動を展開したわけです．その具体的な運動・対策は，それまで以上の徹底的な労働集約と作物の転換による自給の増大と現金支出の抑制によって，農家の自力更正に求めていきました．たとえば，桑畑を縮小しそこに自給用の雑穀や飼料を栽培し，養蓄をおこない，生活用品の自給と販売のための副業創設などです．しかし，このような運動は効果が少なく，それは状況をなかなか打開できなかったのです．その結果，如何に努力しても耕地の狭小さゆえに現状を打開できないのだという諦観にも似た意識が広く行きわたっていきました．そして，この結果，もちろ

ん二・二六事件以降の政治状況の推移が決定的ですが，農村の経済更正は満州移民によって打開するしかないといった風潮へと農民の意識は傾いていったのです．

(13) 日露戦争後のポーツマス条約（1905年）で満州での鉄道の施設権（後にいわゆる南満州鉄道株式会社になるが）とともにロシアから関東州の租借権を譲渡されましたが，いわばこの時が第一次の「満州ブーム」といえるかも知れません．つぎに，第一次世界大戦の大戦景気で中小経営主を中心とする満州への投資ブームが起きこれが第二の「満州ブーム」といえましょう．そして，満州事変から「満州国」建国にさいして，第三のより大きな「満州ブーム」が生じたといわれています．

(14) 緊急開拓事業は，1945年11月に閣議決定された国内開拓事業で，戦後の食糧難に備え，同時に復員者や海外引き揚げ者の生活難を救済するために行われた事業です．総数21万戸が参加したといわれています．しかし，その開拓地は，一部の軍用地を除くと国有林野が入植地であったために，きわめて開拓条件はきびしかったようです．そのために，国内開拓事業も，1955（昭和30）年以降の高度経済成長によって影響を受け，大量の離村離農者を出します．1972（昭和47）年に開拓事業が終わる際には入植者の50％も残りませんでした．

(15) 「満州国」の「民族協和」・「王道楽土」実現のために，日本民族の多数が満州に移住し，諸民族の中核として活躍することが期待されていました．その際に，「土に殉ずる」日満の農民が満州の土を「拓き」，農民と農民との固い握手によってこの大命を果たすことが必要であるとされ，それが満州移民に期待された理念だったのです．農民と農民が固い握手をするためには，中国人に小作をさせて懐手で楽に食っていくのではなく，自家労力を中心とした「自作農主義」で，自給自足を行う農家であることが期待されていたのです．しかし，現実には，日本人開拓民の定着のために，中国人から既耕地を安価で買い上げ，開拓民も中国人農民を雇ったり，小作に出したりと，手作地主として，懐手のある意味で楽な農業経営をしていました．

(16) 満州移民の8割程度が内地では小作か小自作農という貧農でした．その彼らが，満州に移住することによって，一躍10町歩程度の大規模農家へとなったのです．そこでは，夫と年雇いの中国人農夫とが中心となって農作業をし，それで耕作できない田畑は小作に出すという自作地主経営を営んでいました．婦人は，内地への郷愁さえ克服できれば，農作業の手伝いよりは家事を担当ししばしば中国人の女中を雇い，家事と育児に専念する「奥さん」としての生活を送っていました．拙稿「植民地と移民女性」（1995）『アサヒグラフ別冊シリーズ20世紀②女性』朝日新聞社，を参照してください．

(17) 中国人農民や「匪賊」による開拓民への「襲撃」は，開拓民から見れば「襲撃」ですが，中国農民から見れば，もともと自分たちのものであったものを日本人によって収奪されていたわけであり，それを取り返しているだけである，という見方をしていたのではないでしょうか．立場によって，ふたつの見方があることを示すために，「襲撃」と括弧をつけたまま用いています．

(18) 「満妻」というののしりとそれにこめられた蔑みは，単純なものではなく難民状況におかれた当時の日本人の屈折した心理から発せられています．植民地的状況の満州で戦争に負け，その負けた屈辱を決定的にされたのは，目の前で繰り広げられる同胞の女性（時には妻や娘）への強姦であり，そして「生活のため」とはいえ自分たちを「裏切り」中国人と「結婚」していった女性たち（「満妻」）でした（もちろん，一方においては，日本人の男たちは，皆が（じつは自分たちが）生き残るために家父長として「自分たちの女」を売ったり，提供したりしていたわけですが）．家父長制的な意識をもつ男たちは，「自国の女を守れなかった自分たち自身への屈辱感」（上野千鶴子，一九九八）と，女た

ちの裏切りへの憎悪，そしてたらふく食えることへの羨望などが，入り交じった複雑な感情を持っていたのです．「満妻」というののしりは裏切った女たちだけではなく，自分たち自身へのそれでもあったのではないかと考えています．しかし，この「満妻」と蔑まれた経験は，「残留」生活ばかりでなく，日本への帰国においても，そしてその後の生活においても残留婦人の心理に大きく影響を及ぼしてきたのです．

(19) 満人とは満州（国）に住む中国人（漢民族も満州族も）一般をさして用いられていました．満州族の人々をさして満（州）人といったわけではありません．当時は，漢民族の中国人をさして支那人と呼んでいたわけですが，支那人と満人は重複して用いられたようです．したがって，満人は当事者が用いた呼称というより日本人の側が用いたものです．このために，「満州国」同様にある歴史的な含意がありますが，ここでは満州移民の意味世界を表すために彼らの用法に従って用いています．ですが，いうまでもなく，私は，「満州国」および「満人」を正当化する意図など毛頭ありません．

(20) この研究の成果として，私が編集した『「中国帰国者」の生活世界』行路社がこの2月末に刊行されますので，よろしくご参照をお願いします．

(21) 蘭　信三・中里英樹（1998）「計量的歴史社会学の展開と可能性－家族史研究を中心として」『理論と方法』23号を参照して下さい．

(22) 「ライフヒストリーはハイ・ストーリー」であるとは以下のようなことです．すなわち，ライフヒストリーは基本的に長い人生についてのダイジェスト的な語りによって構成されるために，語り手にとって印象に深い点のみの組み合わせでしかなく，人生における「いま，ここの視点」が捨象されてしまうという批判である．これを克服するには，どのような語り方をするのかという語りにおける「いま，ここ」を注目することによって「ハイ・ストーリー」化されることによる限界を克服することであろう．

〈参考文献〉

赤塚不二夫（1995）「メーファーズ――これでいいのだ!!」赤塚他『ボクの満州　漫画家たちの敗戦体験』亜紀書房

蘭　信三（1994）『「満州移民」の歴史社会学』行路社

――――「植民地と移民女性」（1995）『アサヒグラフ別冊　シリーズ20世紀　②女性』朝日新聞社

蘭　信三編（1998）『「中国帰国者」をめぐる地域社会の受容と排除に関する比較社会学的研究』平成7－9年度科学研究費補助金（基盤研究C(2)）研究成果報告書

――――編（2000）『「中国帰国者」の生活世界』行路社

蘭　信三・中里英樹（1998）「計量的歴史社会学の展開と可能性－家族史研究を中心として」『理論と方法』23号

井出孫六（1986）『終わらぬ旅』岩波書店

井上ひさし（1993）「新しいジャーナリズムを創る」『月刊金曜日』通巻1号

上野千鶴子（1998）『ナショナリズムとジェンダー』青土社

臼井勝美（1995）『満洲国と国際連盟』吉川弘文館

大橋洋一（1998）「ポストコロニアリズム」広松渉他編『岩波思想・哲学事典』岩波書店

金子文夫（1993）「植民地投資と工業化」大江志乃夫他編『岩波講座　近代日本と植民地　3　植民地化と産業化』岩波書店

京都大学留学生研究会編（1999）『ライフ・イベント　語られる留学』同会

厚生省援護局編（1977）『引揚げと援護三十年の歩み』同

厚生省援護局編（1987）『中国残留孤児』ぎょうせい

駒込　武（1996）『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店

佐藤郁哉（1992）『フィールドワーク』新曜社

高碕達之助（1953）『満州の終焉』実業之日本社

沈　　潔（1996）『「満洲国」社会事業史』ミネル

ヴァ書房,
塚瀬　進（1998）『満洲国「民族協和」の幻想』吉川弘文館
中野　卓・桜井厚編著（1995）『ライフヒストリーの社会学』弘文堂
平野健一郎（1970）「満州事変前後における在満日本人の動向－満州国性格形成の一要因」日本国際政治学会『国際政治』第43号
西川長夫（1992）『国境の越え方』筑摩書房
――――（1995）『地球時代の民族＝文化理論－脱「国民文化」のために』新曜社
――――（1998）『国民国家論の射程』柏書房
西村大志（1999）「語りから会話へ　～あるアメリカ人留学生のライフヒストリーと身体～」京都大学留学生研究会編　同上書
満州移民史研究会編（1976）『日本帝国主義下の満州移民』龍渓書舎
満洲国史編纂刊行会（1970）『満洲国史』満蒙同胞援護会
満蒙同胞援護会編（1962）『満蒙終戦史』同会
南満洲鉄道株式会社編（1940＝1985）『満洲読本』国書刊行会
溝口敏行・梅村又次編（1978）『旧日本植民地経済統計』東洋経済新報社
宮島　喬・梶田孝道編（1996）『外国人労働者から市民へ』有斐閣
森　時彦（1996）「産業―中国の産業革命」狭間直樹他『データでみる　中国近代史』有斐閣
安富　歩（1997）『「満洲国」の金融』創文社
山田昭次編（1977）『近代民衆の記録6　満州移民』新人物往来社
山田富秋・好井裕明（1998）『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房
山本有造編（1993＝1995）『「満洲国」の研究』緑蔭書房
山室信一（1993）『キメラ―満洲国の肖像』中公新書
リフトン，ロバート（1967＝1971）『死の内の生命－ヒロシマの生存者』朝日新聞社